



Title	少年犯罪と報道 ~ 長崎・佐世保事件取材して ~
Author(s)	田淵, 徹郎
Citation	架橋, 9, pp.147-167; 2008
Issue Date	2008-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/28540
Right	

This document is downloaded at: 2019-09-19T06:43:12Z

少年犯罪と報道

長崎・佐世保事件を取材して

田淵 徹郎

先ほどご紹介いただきました長崎新聞の佐世保支社の田淵と申します。去年の六月一日に佐世保市でありました小六・女子同級生殺害事件は大久保小学校というところで起こりましたが、小学六年生の女の子が同級生の女の子に首を切られて殺されたという事件でした。

その担当をした縁ということで、一記者として取材の実感などを交えて話をしてまいりたいと思います。事件のこゝとばかりではなく、新聞がどのように作られるのかを皆さんご存知ではないと思しますので、取材がどのようなものかを交えながら話をしていきたいと思います。

初めに自己紹介を。出身は生まれも育ちも長崎県で、この学校の裏門のほうの純心幼稚園の近くに、今は新しい高級なマンションが建つていますが、昔は古びたアパートがあつてそこに住んでいました。小学二年の頃に長崎市内の別のところに移ったんですけれども、長大という小さい頃はお兄ちゃんお姉ちゃんを見ているような気がしていました。高校は長崎西高というところで、二十年前くらいに卒業しました。その後は熊本大学の文学部で高校の教員免許取

得のため教育実習を体験しまして教員試験も受けました。

当時は今みたいにあまり倍率が高くない時代で、一次試験もパスしたのですが、今の会社を受けていてそちらが先に受かったので入りました。なぜこういう話をするかというと、学校の授業で話をするのは教育実習以来十七年ぶりで、歳月がたつてまた教壇に立つことにびっくりしているからです。

新聞社に入ったというと、みなさんは強い志をもって入ったと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。みなさん新聞を取って家でご覧になってますか？当時私もお金のない学生だったので新聞なんか取ったり取らなかったりで。なんで新聞社に入ったかというと、書くことが好きだったことにつきます。先ほども言いましたように、私は新聞社と教員試験の二つしか受けておりませんが、もし新聞社に落ちていたら今は高校の国語の先生になっていたと思います。だからそんな強い信念を持っていたわけではないです。

ですが、新聞社に入ってよかったと思うことがひとつあります。それは広い話でいえばいろんなことに関心がもてることです。政治的な、国策にまつわることから、片一方で街を歩いていても新しい店ができたとか、テレビ見ているもこんな話があるというのになるほどな思ったりとか。深くひとつのことを一生懸命やるかたがたを非常に尊敬しているんですが、私はタイプ的にあつちも好きだこれも好きだと反応する浮気性なところがありますので、この仕事に向いているなと思つことがあります。

では新聞づくりについていくらか話したいと思います。(新聞を手を取って)これは長崎新聞ですが、一面からずつと二面、三面と行って、後ろのほうにはテレビ欄、その裏が社会面、その隣が第二社会面。社会事件などを取り上げていて、

比較的生臭い話が載るところですね。一面は政治的な話や、国があれしたどつしたという話が載ることが多いです。第二社会面、我々は二社面といいますが、この社会面でだいたい社会の動きを生々しく伝えることになっていきます。

では、新聞がどのような手順で作られているか。新聞の編集は、一個面を一担当者で組んでるんですね。記者はもちろん一面を書いたり、社会面、ローカル面、文化面などを書きます。新聞記者だから何でも書かされるんですけど、出された記事を「これは一面用の記事だね」「これは社会面用の記事だね」と判断して、それを整理部の担当者が、パソコンに入力されてる原稿を引き出して、組んでいくんですね。

あなたはこの記事とこの記事を使って面を作りなさいという指示が出ると、これを整理部担当者がおこないます。整理部は耳なじみのないところだと思っんですけど、出された原稿をもとにして紙面を組むところですよ。我々は報道ですから、記事を出すところですよ。こういう風にして新聞というのは、まず取材して、記事を書いて、原稿を出すところ、そしてそれをもとにして紙面を組むところ…組むというのは見出しをつけたり、扱いを判断するとかを決めていくんですけど…またそれをチェックしていくところがあつた、そういう流れでできているんですよ。

ですから、我々の仕事というのは実は取材をして原稿を出してそれで原則的には終わりなんです。よく、取材先でも誤解されるんですけど、見出しを我々がつけていると思つていらっしゃる方がいますが、記者は見出しをつけていません。見出しというのは我々が書いた原稿をもう一人の人間が判断して、これはこういう見出しでいいこう、こういう扱いでいいこうと判断して、自分なりの見出しをつけていく。デザイナーのセンスも問われたりします。ですからよく自分の記事がこの程度の記事なのに大きめの扱いがされてたり、逆に渾身の力を込めて書いた原稿なのにちっちゃな扱いだったり、というようなことがあるんですよ。自分の思うようになかなかいかないという現実がありますね。

記事の扱いについてなんですけど、自分たちで勝手に判断しているわけではなくて、今日はこんな原稿を出します、という連絡を「デスク」という人にします。メモ書きにして送ったり。それをバースと集めて、デスクがこの記事は

この面だな、この面のトップ記事はこれだな、ということを決めていく。それが夕方の編集会議でかけられまして、それを編集局長や編集局次長、報道部長、整理部長、報道部のデスク、整理部のデスク……デスクついでというのは記事などをチェックしていく人ですけれども、そういう人が寄り集まって、トップはこれで、これは扱いが大きすぎるからちよつと下げようとか、といったことを判断して、そして、具体的に各面の担当者、「面胆」が進めていくということになります。

ちなみに今日の紙面では「アメリカが核廃絶履行の破棄」が一面トップになっています。これは二〇〇一年、私がちよつと原爆の担当のころに核保有国が核を廃絶しようという約束をやったんですけれども、現在はそれをアメリカが破棄してる状態にあります。ああいう約束は無効だということをはじめてるんです。そのことを実行しなさいという宣言を採択しようという動きが世界的にあるというニュースなんですが、これは被爆地ならではの扱いだと思います。こういうのを一般的には一面トップといい、我々は「アタマ」とか「アタマ記事」とか言います。

脇にはNHKの会長が辞任したというニュース。これを一面の「肩」といいます。アタマ、肩ときて、(紙面の真ん中あたりの)これを「腹」って言います。これは社会面でもどこでも同じなんですけど、これは社会面のアタマだとか、アタマだとちよつときついから肩にもって行こうとか。肩の次の扱いは腹ですね。ニュース記事の価値はアタマ、肩、腹と、こういう順番で決まっています。そういう判断が日常的にされているということです。

あとは小さい記事、一段見出しもあります。新聞に引いてある横線がありますよね、これにまたがって見出しがついてる場合、段見出しって言うんですね、(新聞を指して)これだと三段にわたってる記事だから三段見出し。そして、段にまたがっていない小さい記事はベタ記事といいます。この程度の記事だったらベタ扱いだなとか、これはニュース価値があるので段つけてもらえますか、といったことを僕らが要請することもあります。

取材はどのような形でなされているかについてですが、うちは地元紙ですので記者の数は確かに多いんです。報道部には二十人くらいいます。私の所属している佐世保支社の編集部というところに記者が七人。佐世保支社には営業所や新聞販売を担当するところがあつて、私は編集部です。あと支局というのが県内に十五あります。それぞれに一人ずつ記者が配置されています。福岡支社、東京支社の編集部にも記者がいますね。

本社や佐世保支社は複数の記者がいますから、そのなかで行政担当、経済担当、事件担当、原爆担当、佐世保は自衛隊とか米軍とありますから基地担当といったセクションがいろいろ決まつていて、分担しながら仕事をやっています。

支局はこれに対して管内の人口規模が小さいので一人しかいないくて、「よろず屋」で大変です。何でも一人ではないといけません。私も大村支局にいたことがあるんですが、ローカル面の地域の話題を取材して、市役所回つて行政のネタを書いて、その後に事件が起きたという連絡が入ると社会面に事件記事を書いて……という感じで一日のうちに全く違った分野の記事をいくつか書いたこともよくありました。

また、原稿は毎日締め切りがあり、我々は毎日締め切りに追われる仕事をしています。新聞は面ごとに締め切り時間が違っています。(新聞を開いて)これはローカル面で、地域の話題、わりとほのぼのとした話題といいたましようか、一般の読者にとつては一番入りやすい話題を載せます。この記事で言えば「長崎南高、百人一首で古典にタッチ」なんて見出しが出てますね。こういったローカル面の締め切りはだいたい夕方には終わつてしまふ。あとスポーツ面は、プロ野球の結果がざりざり入る時間が締め切りになります。まあ遅くて十時くらいでしょうか。

原稿はうちが加盟している共同通信社というところから全国ニュースが配信されていて、送られてくる記事を時間ぎりぎりまでに絞らないといけません。一面や社会面はいつ何時、突発的な事件があるか分かりませんが締め切りを遅くまでにし

て、だいたい何も無いときは十一時にこのへんで打ち切りましょう、となる。突発的な事件が起こった場合は十二時すぎても待っていることがあります。

このように毎日締め切りに追われながら、夕方までにローカル面の原稿を出す、その後は社会面用の事件関係のものを出していくとか、締め切りに間に合うように原稿を出していく。一つが終わったら違う面の締め切りが待っていて、毎日毎日一時間単位での仕事なので、なかなか悠長にはいかないところがあります。

そろそろ本題に入ろうと思うのですが、その前に、事件取材というのはどういうふうにするのか、について説明します。テレビドラマっぽい話なんです、記者の仕事は原爆の取材であったりとか、選挙関係であったりとか、「遊軍」といって主に連載企画などを書くセクションであったりとか、その他いろいろ分かれているんですが、その中で事件取材が一番きついですけど、面白いです。分からなかったところがだんだんと取材していくうちに、じわっと分かっていく。行政回りのように、尋ねればだいたい答えてもらえるような取材とちよつと違つて、なんとか一生懸命食いついて自分だけのネタにしようと頑張つて、その結果、分かんなかったことがじわーとあぶり出しのようにして分かってくるっていう楽しさがあります。

ネタの仕入れ方は、これさえあればネタが取れるのかというのがあれば私こそ教えてほしいくらいですね。私は二〇〇三年度までは眞警本部の記者クラブに所属して事件を担当しました。記者五、六人のグループでまわっていたときにつくづく思ったのは、ネタっていうのは人脈だなということです。人脈に尽きますね。

昼間はふらつと眞警本部であったりとか、管轄する長崎市内の五署：長崎署、浦上署、稲佐署、大浦署、東長崎署を署回りして雑談したりで一日が過ぎていって、眠くなったら記者クラブのソファで昼寝をするといったような生活だったんですけども、大事件が起こったときなんかはそうはいかない。今の人は知らないかもしれないけど、「夜討ち朝駆け」ってい

う言葉があります。これはマスコミ業界の日本独特の風習といわれているんですが、警察官や捜査関係者の自宅、あるいは官舎を訪ねて行って、ピンポンと鳴らしてネタをもらう。夜は夜でそーつと訪ねて行き、そこで「この件についてはどうなんでしょうか」と尋ねてネタをもらうというようなことが、現在のマスコミ業界でも実は生きているんです。なにを馬鹿なことを、と思うかもしれませんが。

一生懸命頑張つてますということを見せて、警察官もじぶぶ、しょうがないなあといつて教えてくれる。これは若い記者に身に付けるようやらせてる面もあります。みなさんも夜にいきなり人が来てこの事件について教えて下さいといわれても、そんないきなり来られたら困るよと追い払うと思うんです。ただ、人脈のある人、つまりお互い信頼関係があるとか親しくしていたりとか、そういう関係があれば結構しゃべつてくれるんですね。これでいいのかどうか答えにくかつたらイエスカノーかだけでいいですよ、とか。そういう阿吽の呼吸があります。教えて下さいの一点張りじゃなかなかそれは教えてくれるものじゃない。これは我々の人間関係においても、好きな、信頼している人間には話すけど、それ以外の人には話さないというのがありますよね。人付き合いの濃さが取材に生きてくるのかなということを私は十七年目にしてつくづく思います。

さて本題の「少年事件と報道」に入りたいと思います。先ほど話しましたように二〇〇三年度は私は長崎市の県警記者クラブにおいて、事件担当をしていました。その年は何があつたかみなさん覚えてらっしゃいますか？一昨年の大事件、男児誘拐殺害事件がありました。四歳の幼稚園の男の子が十二歳の中学一年生の少年に連れ去られた。長崎市内の大型家電量販店で誘拐されて、市内の中心部に連れて行かれ、立体駐車場の屋上、地二十メートルの高さから突き落とされたという事件でした。

このとき、みなさんはまだ高校生だったんですね。ご存知の方も多と思います。当時、大事件に発展しました。

その後、去年四月に佐世保に転勤になりまして、行政回り中心にデスク業務。記者の原稿をチェックする仕事ですが、をやるようになりました。いかんせん佐世保には記者が七人しかいませんから、大事件が起こると、行政担当であろうとみな事件のことに関わらなくちやいけなくなりませう。

そうした中で、昨年六月一日に小六女児同級生殺害事件、佐世保市の大久保小学校というところで小学六年生の女の子が同じ同級生の女の子を殺害してしまったという事件がありました。多くの方が記憶してらっしゃると思いますが、非常に衝撃的でした。私は長崎にいた時期に男児誘拐殺害事件を担当し、佐世保に転勤した途端にまた全国を揺るがすような大事件に遭遇してしまつたわけです。

この二つの事件は、長崎新聞にとつて、あるいは長崎県内にとつて二十一年に一度の大事件といわれた事件でした。大災害も事件も数え切れないくらいあつたんですけれども、その中でも誰かが引き起こした事件で言えば、長崎の駿ちゃん事件は二十一年に一度の大事件といわれた。それなのに、その翌年も起きちゃつて、その二つを私は奇しくも担当したわけです。

さて、少年事件なんです、二つの事件について共通点とその違いは何かということに触れていきたいと思います。共通点はいうまでもなく殺人事件であることがひとつ。そして、加害者が少年だつたということ。長崎市の駿ちゃん事件のほうは十二歳の中の男子生徒でした。そして佐世保市の大久保小学校の事件のほうは小学校六年生の十一歳の女の子でした。さらにもうひとつ、被害者も子どもだつたということ。長崎市のほうは四歳の男の子が突き落とされて殺害されました。佐世保市では加害者の同級生の御手洗怜美(ごてんらいみ)ちゃんという女の子が殺害されました。そういう共通点があり、形は多少違いますが事件後の加害少年・少女に対する処分の流れもとても似ているんです。

まず警察に補導された。十四歳未満の少年事件の場合ほとんど凶悪な事件でも逮捕とはいわず、補導といひます。そしてその後身柄が家庭裁判所というところに送致されます。

資料を見ていただきましょうか。「想定される事件処理の流れ」という、事件発生当初に載せたもので、法的にはこうなっています。事件が発生して警察が補導し、そして児童相談所に通告、要するに事件が起きたよってということを知らせる。その後に家庭裁判所に身柄が送られて、家庭裁判所が観護措置と決めていきます。観護措置というのは事件を起した少年少女の非行の状況やそれをなぜ起こしたのかということを探るために、いろんな生活環境や学校の様子をできる限り調べていくんですが、そのために観護措置決定がなされます。家裁調査官が本人や両親と面談をして、話をする。なぜこのようなことが起きたの？ 普段はどうだったの？ といったことを聞いていく。あるいはテスト：いろんな心理テストを含めてなんですけど……これが何に見えますか？とかいろんなテストがありますよね、そういうことをやっていきます。そして少年審判というのが開かれて、あなたはこういう処分が妥当でしょうというのが決めていく。このような流れになっています。

観護措置決定の下に右横に「措置期間は最長四週間」と書いてあります。普通なら四週間以内に措置が終わるんですが、長崎の男児誘拐殺害事件や佐世保市同級生殺害事件については、両方とも途中で精神鑑定というのが入りました。これは少年事件においては非常に稀なことなんです。凶悪事件だからこそ、といえると思うんですけども、佐世保の事件の場合は二ヶ月以上にわたって精神鑑定が行われました。これは観護措置を一旦中断して精神鑑定に移って、それが終わったら、もう一回観護措置のほうに戻る。そういう手続になっていますから、最長四週間とありますけれども、実際には精神鑑定を二ヶ月以上、いろんな調査がおこなわれたんです。

そして、二つの事件に関しては、資料の上のほうに書いてある児童自立支援施設、ここに送られることになりました。参考までに言えば、児童自立支援施設ってみなさん聞いたことがあるかもしれませんが、だいたいは非行を起したとか、いろんな事情があって家庭にしばらく戻してはいけないという少年少女が入所します。施設の中で寮生活みたいなことをして、実際にお父さん、お母さん役をなさるような方も何名かいらつしやいます。そして最近では学校に行かずにそこで授業

をやるため、学校の先生が施設に派遣されたりと、どんどん制度が変わってきています。つまり、普段の生活と家庭生活と学校生活を一緒にやっていく施設というわけです。

二つの事件でも、加害者はそういう施設に送られることになりました。ただ、普通の児童支援施設だと、野母崎に行く途中の平山台というところにある施設の方の話を聞いたことがあるんですが、子どもたちはよく逃走するらしいんですよ。非行歴があることも多いから、職員は必死になつて探すらしいんですね。先生方も泊り込みの先生方がいらつしやいますから夜中じゅう探す。結局見つかつて、どこにいたかと言つて、自宅に帰つてたつていうんです。親が恋しくなつて帰つちやつたつていうケースがほとんどだといいます。まあ家が恋しいということはやつぱり子どもだとなつとよつとほほえましい感じもするんですが。

話が脱線しましたが、二つの事件に関しては、同じ児童支援施設であつても、こういう「脱走」可能というものではなくて、強制措置が可能な児童支援施設であつたという点、ここが違います。強制措置ができるつて何かというつと、普通の施設だつたら強制的に囲い込みなんか一切しないのに、この二つの事件の加害者の少年少女というのは一切抜け出せないような周りが塀に囲まれた、表現が悪いですが刑務所に近いような感じの児童支援施設に送られました。

この施設は関東地方に男子を対象とした施設がひとつ、女子を対象とした施設がひとつしかありません。ですから今、この二つの事件の加害者の少年少女は関東地方の児童支援施設に運ばれてそこで更生のためのいろんなトレーニングや調査をなされている状況にあります。二つの事件は、こつこつとした更正をめぐる一連の流れでも共通していることを覚えておいてください。

では、二つの事件で違つのは何か。先ほどの駿ちゃん事件は誘拐殺害事件だつたですから、まず最初に誘拐があつた。要するに犯人がわからないわけです。私もあの事件の夜、家電量販店で子どもがいなくなつたのを知りまして、その店には夜

中一時くらいまで張り込みました。でもどうもみつきりそうにない。いなくなつたのは男の子で、誘拐つて言つたら普通は女の子だと思つてました。「男の子を誘拐するなんて変な話だ。もし誘拐したなら、いたすら目的ではなくて当然身代金要求だろう」と考へるのが普通のパターンですし、ひよつとしたら事故かもしれない、男の子がさまよつて行方不明になつてるのかも、といろんなことが想定された。結局、そのときは記事にしなかつたんですが、翌朝の九時半ごろ、我々が詰めてゐる県警記者クラブのすぐ近くの駐車場で男の子の遺体が発見された。サイレンの音がけたたましく鳴つて、男の子が倒れてると聞いて、血の気が引くような感じがしたのを覚えています。タベのあの子どもが誘拐されたばかりか、殺されてたというのを知つた時のあの衝撃は今でも忘れられません。

加害少年が補導されるまで八日間ありましたが、その間、犯人が見つからないというミステリアスな、ミステリー小説まがいの展開になっていきました。いろんな情報が駆け巡つて、そのなかでどうもビデオに写つてゐる、アーケードで男の子の手を引いてゐるのが中学生らしいというのが分かつて、大騒ぎになつた。やがて、どこどこ中学校の誰というのが浮かびあがつてきて、やっぱり中学生だつたということで、社会に二重の衝撃を与えましたね。四歳の男の子が突き落とされたという衝撃、その加害者が実は中学生だつたという衝撃、この二つです。

一方、佐世保のほうはどうかといふとまず、その特徴は事件現場が教育現場、学校の中ということがひとつあります。学校の中で児童が殺害された。そして加害者は…大阪の池田小事件だと不審者でしたが…こつちは加害者が同級生だつたといふこと、しかも女の子だつたといふことが挙げられます。普通は殺人なんか縁遠いと思われている女の子が殺害を犯してしまつた。そして駿ちゃん事件は誘拐殺害事件で、男の子と中学生はなんの関係もなかつた。何か関係があつたと当時言われていましたが結局何の関係もなかつた。佐世保の場合は女の子同士がものすごく仲が良かった。ここが違います。そして事

件の影響というのが学校とか児童とかその保護者とかそういうところには広がりを見せたということがこの事件の特徴だつたと思います。このことは他の学校現場の凶悪な事件、池田小事件などと共通しているんですけど、他の児童たちも事件の当事者になつてしまつたわけです。実際に大久保小学校の三年生の男の子たちは騒ぎで駆けつけて、怜美ちゃんが殺された学習ルームというところをすぐ覗いちゃつて、その遺体を見てしまつたんです。また、怜美ちゃんや加害少女は血まみれだつたんですけど、中には加害少女を見てしまつた同級生たちもいました。少女が外に立つてるところで先生が「何があつたんだ」と教室を出ていきましたから教室にいた全員が加害少女を見たというわけではなかつたんですけども、なかには血まみれで戻つてきて教室の前にいた姿を見てしまつた同級生もいたんです。ですからこともたちのショックも非常に多いかつたんですね。そういう違いがある。

整理は後でやりますが、少年事件の取材に関して、昨年（小六女児殺害事件）の例をとつて現場で何があつたかお話ししようと思います。まず事件当時、百を超える報道陣が一斉に現場に集まつてきました。百というと相当の数なんですけれども、それだけの報道陣が集まつたんです。ライバル社といつても同じマスコミですからあまり悪口は言いたくないんですが、例えばこんな話がありました。加害者の女の子の写真をどつかから入手してきて登下校中の大久保小学校の児童に、「殺したのこの女の子だよね。」つて聞いて回つたマスコミがいたというんです。「この女の子が殺したんですよ。知ってる？」と聞いたりとか、あるいは小学校の児童の家にいきなり電話をかけて、たまたま児童が出たら、「誰々ちゃんの親なんだけど」と身分を偽つて「あなたこの事件のこと知ってる？ どうだつたか知ってる？ 教えて。」と聞いたりする。児童はてっきり友達のお父さん、お母さんだと思つちやつてるからある程度のことをしゃべつちやうんですよ。そういうふうには保護者だと身分を偽つて電話をかけて児童から話を聞きたさうとするマスコミがいたりとか、後から保護者の話をきくといろんなことがあつて、結局はマスコミ対して不信感を煽つてしまうという状況が生まれました。

なぜ生まれたかという、やはり「報道合戦」だと思えます。我々はマスコミの間で、登下校中を児童に直接話を聞くのをやめよう、取材当日は保護者に対して取材をやめようというようなことを取り決め、報道協定を結びました。これは近年言われていきますメディアスクラム（集团的過熱取材）の教訓です。つまりマスコミが一人の人に集中して取材をすることによつてその人が言わされたくないと言わされたとか、あるいはものすごく恐怖心を覚えてしまつたりとかいう、それがましてや子どもだつたりしたら、後々まで残っていくような心の傷を負わせてしまうようなことが事実としてあつたものですからそういうことをやめていこう、という流れができ、マスコミとして申し合せをしましょうと、つまり自分のところだけ先駆けて人権無視のような報道取材はやめておきましょうよという流れに今変わつてきているわけです。

しかしこういう大事件になつてくると、いわゆるワイドショーも来る週刊誌もくるという状況のなかでそういう申し合わせが済し崩し的に壊れていくという実態がありました。これは非常に難しいものだったですね。そういうのが一旦あつてしまつと、取材をされた人はマスコミをどうぞとこの社はこう違う、なんて別に考えているわけではありませんから、どうしてもマスコミをひとかたまりとして見てしまふ。ですから後で、「長崎新聞社です。」と言つたとしても、「もうひどい目に遭つてますから。」と一切口を開こうとしなくなつちやうんです。だから先にやつたもん勝ち、しかもどんな方法であるかと先に食い込んでネタをとつたほうが勝ちというふうな風潮が生まれてしまふ。こういう事件でいわゆるネタの奪い合いという形になつてくると、もうどんな手段をとつても構わないというのが空気ができてきてしまいます。

一定の目途として、人の心をかき乱さない程度の取材をやつていこうと努力したつもりなんです、結局は正直者が馬鹿を見る、取材に行つた後はすでに他のマスコミによつて荒らされた、踏みにじられちゃつたあとで、一切取材する余地も何もないということになつてしまいます。それがとてもつらいことです。

あとひとつ印象に残ることとして、被害者側の取材、被害者の怜美ちゃんは殺害されましたから、具体的には被害者

の遺族の取材について触れておきたいと思います。名前を聞いたことがあるかも知れませんが、御手洗恭二さんという方でした。四十五歳です。私の五、六歳上ですね。この方は毎日新聞の佐世保支局長で、我々と同業の方の娘さんが殺害されました。私は御手洗さんと面識はあるんですが、ただ事件後は、直接取材などは一切していません。かわりに遺族の代理人弁護士、遺族が交渉はこの方とやってく下さい、と指定した弁護士の方が全て窓口になって、その方が取材に応じて、それに答えていくという、こまごま形をとりました。

これは長崎市の駿ちゃん事件に関しても同じでした。御手洗さんの場合は、福岡で取材経験があまりで、そのとき知り合った福岡の弁護士さんに代理人を頼みまして、その弁護士さんが記者会見のたびに毎回福岡から佐世保に来て取材に応じてくださいました。遠くの方であっても御手洗さんが信頼していた弁護士さんだったようで、そんな形でわざわざ週に一回佐世保に来る形で記者会見が開かれていました。

私の取材のメモ帳をあらためて見直しますと、この弁護士さんは六回くらい記者会見を開いています。御手洗さんは今どういう状況ですかとか、今後どうされるおつもりですか、というのを弁護士に尋ねて、弁護士が答えるという形でした。これについては資料の右側に、八尋光秀弁護士様という文章があります。これは記者会見の依頼書です。記者クラブのなかの当番制の幹事社が各社から質問事項を寄せ集め、それを取りまとめ、弁護士事務所にこういう項目で質問がとりまとめられましたけれども、これについて十八日の記者会見でお答えいただけませんかという文書なんです。七月に開かれました怜美ちゃんのお別れの会というのがオープンな形で開かれて、そのときは保護者や児童がたくさん集まって、のべ八百人位集まったと思います。ただし、マスコミには非公開なので、それが終わった後、八尋弁護士さんにお別れの会が終わったとうだったのかということを知りたい、しかもそれは弁護士に聞きたいのではなくて御手洗さんから話を聞きたい、ただ直接はお話が聞けないから弁護士が御手洗さんに話を聞いてそれを我々に伝えてもらえませんかと求めた文書なんです。このように、間に弁護士さんを置いて御手洗さんのお考えを聞く、という間接取材がずつと行われていました。

では御手洗さんは一切取材に応じなかったのかというと、テレビで見られた方もいると思いますが、御手洗さん本人も記者会見をしてテレビに出るといふ姿勢を持っていらつしやいました。記者会見が二回、そしてお別れの会はみんなで合同のお葬式をする形のものだったんですけれども、そのときにもステージに立ってみなさんに感謝の気持ちや今自分はどうな心境ですよという話を語ったり、壇上であいさつされるということもありました。その他にも手記というのを折に触れて出していらつしやいます。一昨年の駿ちゃん事件の被害者の種元駿ちゃんのお父さん、種元毅（たねもと・つよし）さんも折に触れて何回か手記を出してらつしやいます。見たことあるひといますか？新聞やテレビなんかでみたことある人？おそれ多くの人が見たことあると思います。種元さんの場合は記者会見等を用意して、マスコミの前に姿を現すということも裁判所に入るといったことを除いて一切ありませんでした。

資料の新聞記事の左側なんです、これは9月15日ですから少年審判が終わった日、つまり加害女兒が児童自立支援施設に送られることが決まったその日に御手洗さんが出した手記です。これはあとでじっくり読んでおいてください。非常に切実なものがあります。ざっと引用しますと下から二段目でしようか、みなさんにぜひとも読んでほしいのですが、今の学校の先生たちは子どもと直接向き合う気持ちで学校を支えているのか、といったような内容です。要するに御手洗さん本人も事件を通じて悲しみにくれるばかりではなくて、こういった教育行政に対する疑問であったりとか社会そのものが子どもを支えているのだろうかという疑問がわいてきて、そこに注目されている。子どもを失って三ヶ月半の人がこれだけのことを考えて、疑問を投げ掛けていくという重さを受け止めていただけたらと思います。

このように、被害者の遺族の取材というのは非常に難しいし、また我々も心情を考えれば直接取材ができないということがあります。ですから弁護士を通じて直接取材というのとはなかなかできません。間接取材にとどまってしまうことにならざるを得ません。その中で私が忘れられない経験がありまして、それを「記者の目」というコラムに書いていたんですが、それ

が資料の右下にあります。去年の八月のお盆のときに種元駿君のお父さんが精霊船を佐世保から出したんですね。私は佐世保で勤務してましたから、その取材をしました。どうして佐世保から船を出したかというと種元駿君のお父さん、お母さんは佐世保のご出身で、ご近所の幼馴染という関係だったものですから駿ちゃんの初盆のときに精霊船を出すということになったんです。ただ、マスコミとの間に立っておられる代理人の弁護士の方から直接取材はやめてほしい、そのかわり種元さんのコメントは用意しましょう、と。コメントは出すし、撮影がノーということはいませんが、ただ直接取材はやめてほしい、と依頼がありました。精霊船を撮るといっても脚立の上から構えての撮影であって、本当は話を聞きたいことがたくさんあるんですが話しかけてはいけないという取り決めがありました。ですから一方的にカメラを向けるばかりでした。そういう経緯をコラムに書きました。私と種元さんの距離はほんの二、三メートルなんですが、話し掛けることもできず、心の中は理解できるものではありません。それをつくづく実感しました。

次に、先ほど話しました「マスコミ不信」が去年ものすごく湧き上がってきた状況でどのように取材をしたのかということについてお話しします。教育関係に対しては公的な行政機関ですから当然取材に応じざるをえない。それでも学校の姿勢はなかなかかたくなだったんですけれども。しかし事件の全容を知る上ではやっぱり子どもたちの話は聞きたかった。普段の怜美ちゃんはどうだったのか、加害少女のほうも普段の生活はどうだったんだろうということを開きたいんですが、なかなか子どもたちに直接取材ができませんし、ましてや保護者もマスコミに対してものすごく不信感を持っている。こういう中でどうやって取材をしていけばいいのかというのはいくつか内部的にも話し合いを重ねたところです。そうしないと事件の核心や背景に触れることができないというジレンマがありました。

そこでどうしたかということなんですが、保護者はマスコミに不信感がありました。もう一方で学校に対しても不信感があったんですね。事件のことについて話さないでほしいという要請を保護者に回したり、実際これをPTA会長がやった

なんていうことが報告書から市の教育委員会がまとめた報告書に明記されています。ただ、PTA会長が思いつきでマスコミに一切話すと……いわゆる箝口令といいますが……それを一人の権限でやれるものなのだろうかということは今もはなはだ疑問です。はっきり言えば学校が関わっていないはずはないんですが、真相は明らかになっていません。いずれにしても保護者は学校から自分たちは口止めされたという不満がものすごくあったんですね。結局マスコミを通じてしか自分たちの考え方が言えないという風に考えて下さる保護者の方々がいらつしやって、一方でこちらのほうは取材意図をきちんと説明していく中で、口を開いて下さる方がぼつぼつと出始めました。

事件から一カ月くらい経った頃に、「じゃあ、うちのことも一回会ってみますか」ということも言って下さり、それは実際にうちの社会面のトップを飾りました。自分も立ち会うからうちの子供から話を直接取材してもいいですよと言ってくださるお母さんが実際にいたんです。そういう感じで、これもマスコミ不信とかマスコミをひとつの塊として見てしまう風潮の中を突き抜けて、こちらが誠意を持って話をしていけば、そこで心が通じて下さる方もなかにはいらつしやいます。全てがそうした信頼関係、真摯に話をしていくことが鍵なんだなあとつくづく思いました。通り一遍等のことや腕ずくの取材より、真摯におつかっていくこと以外に取材方法はないんだな、そういうふうにしなないと結局は口を開いてもらえないんだなということをつくづく感じました。

これは講演の趣旨から外れるかもしれませんが、何故小学校六年の女の子がこの事件を起こしてしまったのか、みなさん考えたことがありますか？動機にあたる部分であるとか、事件に至る背景にあたる部分では分からないことが非常に多いです。少年事件というのはなぜというのなかなか突き止められない。事実が公表されないというのは非常に難しいところですね。さっきの一連のこの流れをもう一度見ていただけますか？右の方ですね、事件が起こった後警察が補導しますが、この補導されたときに警察が何か発表してくれるのかというと、実は非常に簡単な報道資料が流されてくるだけなんです。六月

一日十二時半ごろ市立大久保小学校内で六年生の女の子が刃物で切られて倒れている、詳細については不明だ。こういう資料が出ただけだった。ですからそれ以外のことで公に発表されたことについてはありません。記事は警察情報で元であるんですけども、詳しいことは公になってないんですね。

少女はその後児童相談所に運ばれて、家庭裁判所でいろんな調査がおこなわれて、その少女の生い立ちであったりとかなぜこのような犯行に至ったのか、生活態度はどうだったのか、というようなことをいろんな形で調べるわけです。これも原則的にはオープンにされません。オープンになるといったらあとは「児童自立支援施設に送るのが妥当でしょう」という処分結果についてだけなんです。

つまり事件が起きた、ということはおわかる。入り口のところは分かる。その犯行を犯した加害者である女の子が児童自立支援施設に送られることが決まった、という出口もわかる。ところがその中間に何があったのか、要するに女の子の名前も含めたプライバシーは何一つオープンにされない。こういう中で取材を進めていかなければいけない。こういうところが少年事件の一番の難しさではないかと思えます。

話は戻りますが、こういった少年事件の難しさを越えて、なお取材をしなくてはいけない。そこでは保護者の方であったりとかいろんな関係者の人の話というものをつぶさにあたっていくより他には何にもないんです。

参考までにこの加害少女の生活環境について触れます。大問題というほど問題ではないんですけどもつぶさに見ると問題があったという、微妙な状況にあった感じですね。親は子どもをあまりかまってない。家庭裁判所が処分を決定した折に：これは例外的なことなんですけれども：なぜこういう処分を下したかという処分決定要旨というものを発表しました。その中では、あまり手のかからない子どもだったというふうに言っています。いい子だったんですね。一方で親は教育熱心な一

面があつたりとか、パソコンを持たせたり、あるいは家庭訪問のときに父親が「うちの子はこんなに熱心に勉強をしている」と先生に一生懸命自慢というか力説して見せたりすることがありました。そして熱心に勉強させたいがために母親がミニバスケットボール部をやめさせてしまつたり、そういう生活環境の変化というのがまずあつた。

そして被害者である怜美ちゃんとのいさかいというのでもつひとつあつた。いろんな交換日記なんかのやり取りもあつて、そこでもトラブルがあつたんですが、決定打となつたのが校庭で遊んでるときに、おんぶしていた怜美ちゃんが「重い、重い」と言つたことを体重が重い自分が馬鹿にされたんだと違つてううに受け取つてしまつて、そこで憎悪が深くなつてしまつた。

あとひとつ、精神面の変化というものがあつました。つまり、小説や映画の暴力的描写に対してもさくくのみりこんでそれが尋常じゃなくらいだつたと思われれます。ただ普通じゃないといつても普通つていふのはどういふことなのかといふと困るんですけれども、我々から見た範囲で言つてこれはちょっとかなりのめりこんでるなと思わせるようなことをホームページの書き込みでしていました。これはマスコミで報じられてますから、ご存知のかたもいらつしやると思ひます。そういつた生活面の変化であつたり、学校での友達との関係の変化だつたり、あるいは自分自身の暴力描写への傾倒、それらが同時並行的に起こつたといわれています。

ただ、これだけで誰でも殺人を起こすんでしょか。化学反応みたいにA、B、Cがそろつてそれを混ぜ合わせたらこういふ事件が起こるなんてことは言えないですよね。こつすればこうなるのだという因果関係は絶対言えない。こつこつとは事件取材の難しさですし、特に少年事件においては事実が公表されないことがありまして分からないことがたくさんあります。

ひとつ理解していただきたいのは、心理学の専門家にも聞きますと、小学校六年生の特に女の子の年齢というのは微妙な

時期で、大人に近い強い自意識というものが芽生えていく時期だというふうに言われている。そういう時期にちょうど差しかかっちゃったからなあと、刑事事件にあたって精神鑑定をさまざまに手掛けてきた先生はおっしゃってました。皆さんもわかると思うんですが、仲がよい友達がいって、そしてその子に対して憧れもある。怜美ちゃんは勉強もできて、みんなのリーダー格だった。グイグイみんなを引っ張っていく立場だった、目立つ存在だった。そういう憧れであったりとか親しみであったりとか、そういう感情はちよつとしたきっかけでねたみや嫉妬に変わって、「何目立とうとしているの」とか「自分はちよつと前にでて気に食わない」と、ころつと変わっちゃった。そういう親しみの感情、羨望つまり、うらやましい感情がちよつとしたきっかけで嫉妬や憎悪に変わったりという経緯は、みなさんもたぶんお持ちなんじゃないでしょうか。そして場合によってはそれが殺意に変わり得るということですよ。

特に加害の女の子はちよつと拍車がかかっていきやすい状態だったというふうに言われています。つまり、その微妙な時期にいろんな家庭環境やあるいは学校での友人関係でものごくストレスがかかっていた。特にアクセルがかかりやすい時期にそういう抑圧っていうものがかかってしまった。我々大人だったら、そういう悩みがあつたら人に打ち明けたり、よくないことですが一生懸命我慢するとかですね、ここは耐えようと我慢する、または一時的に憂さを晴らすとかいろんな方法があるでしょうけど、そういったブレーキにあたる部分を子どもの頃はもたなかつたですね。その辺が未発達だった。ブレーキが壊れてたというよりはブレーキというものがそもそもなかつた状態。アクセルを強く踏み出す、強い自意識に対して持ち始める時期にもかかわらず、また、それを加速させる要因がさまざまにあつたにもかかわらず、一方ではブレーキが存在しない状態だった。そういうアンバランスな状態の中で一気にあのような状況に向かつてしまったのではないかなということをとるんな人の話を聞いて思ったんですが、皆さんはどうお考えでしょうか。

皆さんの中には教育に携わっていく方がいらつしやると思つうので、もし事実を知りたいのであれば長崎新聞のホームページ

ジでもこの事件に関することが一項目立ててありますから、そこをたどっていけば全ての記事を見ることが出来ますので、興味のある方は見てください。そしてなぜということにこだわって問題を考えていく、これはどれたかどっていつても分からないものは分からないですけれども、もし関心があるんだしたらこの心の底に何があったかということを感じ取りと考えていつてほしい。あるいはいろんな形で検証を記事や論文が出てますから、そういうのをかき集めて考えてみるのもひとつの考え方だと思います。よければそういうことも、関心がおありの方はぜひともやってみてほしいし、場合によってはひとつの自分のテーマにしていつてほしいなと思います。

何か質問があれば受け付けたいと思いますが何かありますか。

*本稿は、二〇〇五年二月長崎大学で開催された連続講義「犯罪と人権(三) 犯罪報道」の講演録に加筆したものである。

(テーパーライター 井戸 江里子)